

京都大学	博士（文学）	氏名	浦井 聡
論文題目	田辺元の宗教哲学—倫理と宗教の転換媒介—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、田辺元（1885-1962）の哲学をその中心課題である〈倫理と宗教の転換媒介〉から読み解こうとする試みである。</p> <p>田辺は西田幾多郎（1870-1945）と共に京都学派の礎を築いた哲学者であり、西田哲学に並ぶ田辺哲学を構築したことで知られている。田辺哲学は数理哲学・科学哲学・論理学・倫理学・歴史哲学・政治哲学・宗教哲学・文学（詩）にまたがる壮大な思想体系をなしている。</p> <p>田辺哲学は西田哲学と共に京都学派の両極をなしているが、現在に至るまで後者に比せば研究の対象となることがきわめて少なかった。死後30年以上もの間、日本の哲学研究の場ではほとんど忘れ去られ、まれに田辺の弟子筋にあたる研究者によって取り上げられる程度であった。2000年頃になってようやく田辺の社会存在論「種の論理」（1934-41）が現代的意義を持つ社会論として再評価され始め、また3・11以降は最晩年の「死の哲学」（1953-62）が死者をめぐる哲学として脚光を浴び始めたが、それらの研究の大半は、田辺哲学の一部の主題だけを取り上げるだけにとどまっていた。田辺哲学が1944年を境にして「懺悔道」としての宗教哲学へと移行し、その相貌を大きく変化させたという事情もあり、この転換点の前後で区切った上で、一時期を取り上げて解釈を試みるというのが従来の研究の一般的な傾向であった。</p> <p>こうした状況において、広大な領野を持つ田辺哲学全体を俯瞰して統合的に解釈しうる視座を確立することは、田辺研究において喫緊の課題となっている。本論文が取り組むのは、そうした形での田辺哲学の体系的再構築という課題である。</p> <p>本論文がそのための切り口として設定するのが、〈倫理と宗教の転換媒介〉である。田辺哲学には、その主題の多様性や哲学的立場のめまぐるしい変化に反して、その開始期から最晩年に至るまで、一貫して追究されている問題関心がある。それが倫理である。ただし、田辺における倫理は、すでに初期の時点から通俗的な意味での倫理ではない。田辺は初期の西田から強く影響を受け、西田が『善の研究』で示した宗教的枠組みを踏まえて絶対者との関係を含む倫理を模索していた。つまり、田辺はつねに絶対者との接触によって初めて可能になるような倫理を考えており、その接触のたびにそれが高次の倫理へと転換していく動態を追い求めていた。この倫理と絶対者の関係こそ、本論文が〈倫理と宗教の転換媒介〉という言葉で示すものである。このような仕方で徐々に高められていく倫理こそ、田辺が初期から最晩年に至るまで語り続けた事柄である。</p>			

この意味での〈倫理と宗教の転換媒介〉は、「種の論理」以降、絶対者と自己との不可欠な媒介として「社会」や共同性を組み込む社会存在論として展開されていた。こうして本論文においては、田辺の社会存在論を解明していくことが取り組むべき課題となる。通常、田辺の社会存在論と言えはすぐさま連想されるのは「種の論理」である。これに対して、本論文が証示しようとするのは、「懺悔道」以降の宗教哲学は、社会存在論から離れたわけでは全くなく、「種の論理」で構築された社会存在論に「懺悔道」の救済論が接ぎ木されることによって、〈宗教的社会存在論〉と呼ぶべき論が展開されている、ということである。ここに田辺の宗教哲学の独自性があるのだが、従来の研究では「懺悔道」における社会存在論の構造が主題的に問われることはなかった。このような認識の下、本論文は、「種の論理」と「懺悔道」以降の社会存在論の連続性を示すことによって、「種の論理」から最晩年の「死の哲学」に至る田辺の社会存在論の全体像を描き出すことを試みる。

本論文は二部から構成される。第一部「田辺哲学の基本原則—絶対転換・絶対批判・絶対媒介—」では、田辺哲学を貫く〈倫理と宗教の転換媒介〉の姿を自己と絶対者との関係を踏まえて明らかにする。第二部「宗教的社会存在論の解明」では、社会を基点として自己・社会・絶対者の三者の関係を描く宗教的社会存在論の姿を明らかにする。

(1) 田辺哲学の基本原則—絶対転換・絶対批判・絶対媒介— (第一部)

田辺哲学は絶対無を根本原理として成立しており、これが田辺における絶対者である。この概念は西田の『善の研究』で示された実在概念を田辺が20年の歳月をかけて徐々に発展させた末に提示されたものである。絶対無は田辺の弁証法（絶対弁証法）を可能にする原理であり、ありとあらゆるものを止揚する権能（絶対転換）と媒介する権能（絶対媒介）を持っている。

〈倫理と宗教の転換媒介〉は自己と実在や絶対無との接触において実現する。この実現の契機を、初期田辺は直観における〈実在との冥合〉に見出していたが、「種の論理」以降は〈理性の二律背反〉を契機とするようになる。「種の論理」では理論理性の二律背反が絶対転換を経ることによって実践理性に基づく理性的な主体が生じると提示される。これが〈倫理と宗教の転換媒介〉を実現させた主体である。しかし、田辺は「種の論理」の展開と戦時下の時局の進展の直中で、実践理性をも含めた理性全体の無力に直面する。そして、この無力の嘆き（懺悔）の直中でこそ、自己は絶対者に出会い、救われること（死復活／絶対転換）ができるようになる。ここにおいて、絶対者の救済による新たな〈倫理と宗教の転換媒介〉が実現する。この見解に基づき、「懺悔道」以降は哲学と社会的実践のあり方が新たな地平において描き直されることになる。

(A) 哲学

理性の無力に直面した自己にとって、理性の営みである哲学は独力で十全に行えるものではなくなる。なぜなら、自己は理性の権能によってはいかにも絶対知にたどり着けないことが露わになるからである。この無力の認識こそ、田辺が理論理性・実践理性を含めた理性全体の権能の批判（絶対批判）として示したものである。「懺悔道」で展開される宗教哲学は、この意味での絶対批判を経た新たな哲学である。これは死復活における絶対者との出会いによって与えられた智慧を手引きにして行う哲学であるため、ここにおいて哲学は絶対者に対する信を必要条件とし、絶対者と共にあることではじめて可能になるものとなる。田辺が自身の宗教哲学を「哲学ならぬ哲学」や「他力哲学」と呼んだ所以である。

(B) 社会的実践

絶対者に与えられた智慧を持つ者（空有）には、内に宗教的契機を宿す高次の倫理（宗教の還相面としての倫理）が可能となる。そして、この倫理に基づく空有の社会的実践によって、社会へと絶対者のはたらきが浸透し広がっていく。この浸透は具体的には、他者への救済の伝播として実現する。すなわち、空有はその社会的実践によって他者に絶対者のはたらきを伝播させ、その救済のきっかけとなる（救済の絶対媒介性）。後者がさらに別の誰かに救済を伝播させることによって、各社会の中に空有を場とする絶対者のネットワーク（実存協同）が形成されていく。この実存協同こそが、田辺の宗教的社会存在論の中心概念となるものである。

(2) 宗教的社会存在論の解明（第二部）

田辺の社会存在論はアリストテレス以来の〈類-種-個〉の範疇を用いて人類社会の全体を〈人類-社会-個人〉に分類して捉える枠組みである。前者の範疇を用いて自己と社会の関係を表現すれば以下のようなになる。個は必ずある時代のある種の中に生まれ、命ある間は種との関係から逃れることはできない。種は個を育む場であると同時に、個がそれに逆らえば迫害されるようなものである。このような種の二面性と個との関係こそ、田辺が社会存在論の主題に選んだものである。

個は種に生まれ成長する過程で、種に固有のさまざまな慣習を身につける必要に迫られる。これにより個は種の慣習を内面化した主体として成立する。だが、このような主体の意志は内面化された種にコントロールされたものとならざるを得ない。田辺はこのような所与の個を〈真の個〉とは見なさず種に分類する。つまり、田辺における種と個の関係は単なる量的差異ではなく、質的差異を示している。

種に分類される個人が範疇〈個〉（真の個）に分類されるようになるのは理性の二律背反における絶対転換を通してである。すなわち、「種の論理」では理論理性の二律背反における絶対転換（死即生の転換）が、「懺悔道」以降は実践理性の二律背反に

おける救済（死復活）がその契機である。このように成立する真の個は、第一部で見た理性的個人ないし空有を指す。そして、真の個の行為を通して社会を改善することを企てるのが田辺の(宗教的)社会存在論の理念のひとつである。以上から、1944年の前後で、田辺の社会存在論は、その内容には変化があるとしても、基本的な枠組みは変わっていないことが分かる。つまり、〈種-個〉の関係のとらえ方については、「種の論理」と「懺悔道」以降とで連続性が保たれているのである。

そして、真の個が行為することによって、種は絶対無のはたらきを宿すことになる。ここに生じるのが「種の類化」であり、この類化した種を田辺は〈類〉に分類した。そのため、〈類-種〉の関係も〈種-個〉との関係と同じく量的ではなく質的差異を示している。

〈類〉と見なされるのは「種の論理」では理性的国家であった。だが、この理念の追求の中で「種の論理」は理性的国家への個の奉仕を説き、国家絶対主義へと陥ることとなった。一方、理性の無力を認識した「懺悔道」以降は理性的国家を理念とすることはできない。そこで田辺が新しく〈類〉と見なすのが実存協同である。実存協同は空有を場として絶対無のはたらきが広がることによって形成される人々のネットワークである。実存協同は『実存と愛と実践』や『キリスト教の弁証』の中で〈類-種-個〉の範疇で表現されているため、「種の論理」と「懺悔道」の社会存在論が〈種-類〉の関係においても地続きであることが分かる。

〈類〉が理性的国家から実存協同へと変化することは、田辺の社会存在論の拡張を意味する。なぜなら、「種の論理」は「人類の協同」を掲げつつも、国家間の調和や協同について語る枠組みを持たなかったからである。だが、実存協同はそのような枠組みを持たずとも、空有から空有へとネットワークが拡大することによる可能的な人類の協同を語るができる。こうして、「種の論理」の理念「人類の協同」は、「懺悔道」以降の実存協同においてはじめて十全な形で実現するのであり、実存協同の拡大による人類の協同の成否は、個々の空有の社会的実践に委ねられることになるのである。

(論文審査の結果の要旨)

田辺元(1885-1962)は、西田幾多郎と共に京都学派の哲学を代表する人物であるが、尋常ならざる凝縮性と独自の理路をもつその思想は、西田のそれとは種類を異にする難解さをもち、時代状況の変化もあって、死後急速に忘れ去られていった。しかし、今世紀に入る頃から再評価の機運が高まり、中期の「種の論理」の独自の意義や、最晩年の「死の哲学」の死者論としての可能性などをめぐって重要な論考が次々と現れてきた。だが、田辺哲学の全体を扱ったモノグラフィーがまだほとんどないことに加えて、なお重大な欠落がある。それは、第二次大戦末期の「懺悔道=Metanoetik」への転回を起点とする後期の宗教哲学が、その重要性にもかかわらず十分に研究されてこなかったことである。浄土真宗、キリスト教、禅仏教と依拠する宗教を次々と変えつつ、「不断の懺悔」を核として「無即愛」に動かされた「哲学ならぬ哲学」を展開するその奇矯な立場は、西田を軸とする京都学派の宗教哲学の主流からは不可解な異物とも見え、敬して遠ざけられてきたというのが実情であろう。

しかし、この宗教哲学が田辺の思索の決定的な構成要素であることは間違いないのであって、それを適切に位置づけることなしには田辺哲学を理解したことにはならず、その意義を評価することもできない。こうしたことを踏まえて、「田辺元の宗教哲学」の理解と評価という課題に正面から取り組んだのが本論文である。もちろん、田辺哲学の全体から「宗教哲学」という特殊な部分だけを切り出して考究しただけでは、上記の課題に応えたことにはならない。本論文は、目まぐるしく動いていく田辺の思索世界を初期から最晩年まで詳細に検討し、その全体を貫く一本の筋道を「倫理と宗教の転換媒介」として定式化する。その上で、この「転換媒介」の理路を徹底化したものとして「懺悔道」以降の宗教哲学を位置づけ、それが著作ごとにしかるべき順序で生成展開していくさまを跡づけていくのである。その意味で、本論文は田辺哲学の全体に対する行き届いたモノグラフィーともなっている。田辺哲学の研究史と近年の国内外の研究を周到に吟味しつつ、田辺のテクストの細部における用語法の微妙な変化を追跡しながらその思索世界を理解しうる形へと再構成していく論者の手腕は優れたものである。今後の田辺哲学研究に対して貢献する所の大きい論文であると言えよう。

本論文において、とりわけ評価に値するのは以下の三点である。

まず第一に、「懺悔道」と称される激烈な転回の前と後の田辺哲学の関係という田辺研究上の大問題について、明確な解釈上の見取図を提示しえたことである。論者によれば、転回前の「絶対無」が絶対転換・絶対媒介として、つねに非合理に刺し抜かれつつもそれを否定的媒介とする絶対合理主義に基づいていたのに対し、転回後の「無即愛」はこうした絶対合理主義が「懺悔」として現成する「絶対批判」によって砕かれた後の「超理性的理性」を体現するものであり、両者の間には断絶がある。しかし他方で、このような転回は論者が「宗教的社会存在論」と呼ぶ田辺の一貫した問題追究の徹底化によって生じたものであり、その意味では「懺悔道」の前後における

田辺哲学の連続性を証示している。この見取図はよく考え抜かれたものであり、田辺哲学の包括的な理解の足場として有益なものである。

第二に、「懺悔道」以降の田辺の宗教哲学の歩みを、「種の論理」以来の「社会存在論」をその「宗教的根柢」にまで到り着いた所から一層具体的に彫琢していくものとして読み解いたことである。とりわけ、『懺悔道としての哲学』(1946)から『実存と愛と実践』(1947)、そして『キリスト教の弁証』(1949)へと、戦前の「種の論理」以来の類種個の三一構造が「懺悔」の絶対転換を核として新たに描き直されていく様子を浮き彫りにしていく論述は本論文の白眉である。細部の解釈には異論の余地もありうるが、後期の田辺哲学が社会存在論的関心から離れて宗教哲学へと向かったとする通説に対して説得力を持って反論し、田辺の宗教哲学の独自性を描き出すことに成功している。

第三に、以上のような考察を通して、田辺の宗教哲学の根本性格を、宗教の「中」とどまることを自らに許さず、宗教の「中」と「外」を繰り返す往還することを生命線とするものとして特徴づけたことである。田辺的宗教性の核心に置かれる「不断の懺悔」は、自己を他者の許へと送り出し、つねに二律背反を産み続ける社会的生のあるべき姿へと更新しようとする共同行為の形成因となる。この点を明確化したことによって、自己の宗教的安心を基準とするならば「破格の語り」に響く田辺の言説が、「倫理と宗教の転換媒介」を核とする宗教哲学として描き直されたのである。

このように評価すべき点を多くもつ本論文であるが、問題点がないわけではない。全体として、各時期の田辺の言葉や概念を巧みに連関づけることで、田辺の思索世界を平明な表現により理解可能な仕方で構造化することができているが、その分、田辺が自らの語彙に畳み込む意味の重層性が取り落とされ、理解が平板になっているきらいがある。また、そうした仕方で構造化に注力するあまりに、*Sachlichkeitsdialektik* (即物弁証法) を標榜する田辺の思索が面する「*Sachlichkeit* (事象性)」がいかなるものであり、それに対する田辺の取り組みがどこまで妥当性を持つのかという点については、十分な吟味がなされていないように思われる。しかし、こうした点は、本論文の達成を土台として次に取り組むべき課題でもあって、本論文自体の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2021年11月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。